

東京オリンピック2020が終わって

2021年8月

久米五郎太

7月23日に始まったオリンピックは8月8日に終わり、オリンピック旗は次回の開催地パリ市に渡された。陸上のチケットを娘が手配してくれていたが、結局無観客になった。17日の間、もっぱら自宅でテレビで中継・録画、ダイジェスト、ニュースを眺め、日経やニューヨークタイムズの記事を読み、雑誌「ナンバー」の特集号にも目を通した。一人の視聴者の個人的な見方にすぎないが、印象や思ったことを記しておきたい。

今回の夏季オリンピックは異例の状況下でおこなわれた。世界的なコロナ蔓延により一年の延長となったうえ（ただし名称は2020トウエンティトウエンティと変えず）、感染が拡大する国内では世論調査では開催反対・再延期の声が多かった中を実施、宮城・静岡での競技をのぞき、ほとんどの競技は無観客で開催された。参加者は選手だけで11,000人、大会関係者、マスコミなど全体で

はざっと5万人近くだろうか。全員にPCR検査が行われ（合計70万回）、選手村・有明地区を中心とする会場・輸送機関にまたがる大きなバブルを作り、その中で厳しい感染対策が取られた。海外・国内からの選手・関係者や1万人弱といわれるボランティアはほとんどが事前にワクチンを接種したとみられる。7月初めからの大会期間中で合計で500人弱の陽性（感染）者が出たが、そのうち選手は毎日数名程度で済み、日本人の輸送などの契約業者に感染者が多数発生した。外国人は日本到着後14日間はバブルの外に出て市内で観光や買い物をすることも厳しく制限され、近くのコンビニなどへの外出はあったものの大筋は守られたようだ。日本の夏特有の高温多湿対策も今回の大きな課題であり、早くからマラソン・競歩は会場を札幌に移すことを決定、期間中にも女子マラソンやテニス・サッカーなどの開始時間が直前に繰り上げあるいは繰り下げされた。それでも朝7時スタートの男子マラソンでは3割弱が途中棄権を余儀なくされた。

前回の東京オリンピックは1964年10月、当時は大学2年生だった。チケットを多分家庭教師先でもらい、国立競技場の陸上競技を一人で見に行ったこと

をぼんやりと記憶している。その後、数えてみると14回のオリンピックがあり、色々な場면을テレビで見た訳だが、自国開催かつ時間のある今回がもっとも熱心に見たと言える。33競技、339種目と実に多くのゲームがあり、メジャーの水泳や陸上だけでなく、柔道、体操、バスケやバレーボール、七人制ラグビーなどなど、時間の長短はあったがおおよそその競技を一応見た気がする。友人が運営に関わると聞いたホッケーやセーリングをもう少し見ようと思ったが、地上波やNHKBSではあまりやっていなかった。マイナースポーツはJ:COMやネットで中継をしていたのかもしれないが、今からではもう遅いようだ。

最も長く見ていたのはゴルフ。会場の霞が関CCでは数回プレーをしたことがある。大きなグリーンの傾斜を読もうとしたがテレビではやはり難しい。しっかり伸ばしたラフで、松山がフェアウェイに戻すのに苦労した場面もあった。バンカーの砂も均等に入れ、見ていた限りでは深いアリソンでも選手は一回で出していた。コロナからの病み上がり直後らしい松山は優勝に今一步及ばず、七人での三位決定戦に回った。そのプレーオフの中継が途中で切られ、他の競技に変わったのにはいささか驚いた。女子ゴルフは時間帯もよく、3日間中継を見た。ア

アメリカのチャンピオンを10代でやり、そのごの不調から戻ってきたニュージーランドの小柄かつ細身のリディア・コ（韓国系らしい）が追いつけるのを応援した。彼女は稲見萌寧とのプレーオフで負け、結局3位で終わったが、途中同じ組一位のニリー・コルダ（現在アメリカでトップの由）がナイス・パットをする
と、軽くハグをし、稲見とも声を交わすなど余裕のある態度に関心した。

テニスは錦織（すでに31歳）がイワシユカ（ベラルーシ、27歳）と三回戦で当たった。実に蒸し暑そうなコートで、休憩の時は冷却ベストをつけ、体を冷やし、ドリンクを飲み、頻繁にタオルを使う。勢いでは劣って見えたが、淡々とプレイし、タイブレーク、デユースを繰り返して、1時間以上の激闘の上、そのセットを7-6で取ったのが実に印象的であった。その試合には勝ったが、準々決勝では世界王者ジャコビッチ（セルビア）に簡単にストレートで敗退し、ジャコビッチも準決勝でスペインの選手に敗れた。優勝はドイツの選手。大坂なおみも早い段階でチェコの選手に敗退、直後のテレビ・インタビューには現れず、「聖火の最終ランナーになったのは名誉で、うれしかった。試合では負けてごめんなさい」というメッセージが送られてきたとテレビは報じた。

サッカーも日本代表チームの試合を中心にずいぶん見た。予選ではニュージー

ランドとフランスとの対戦、決勝グループに残ってからのスペイン戦、三位決定のメキシコ戦。そして決勝のブラジル・スペイン戦。スペイン戦では相手チームにボールを長く持たれ、延長となりゴールを決められたが、決して悪くはなかった。久保などの攻撃力、PKでの集中力など、アンダー24と吉田、酒井などのナショナルチーム・メンバーの組み合わせは思った以上に強かった。

ゴルフもテニスも他に大きな、多額の賞金を獲得できる大会があるにもかかわらず、グローバルに活躍している選手が国の代表としてメダル争いにエネルギーを注ぐ姿は新鮮だった。サッカーは団体戦なので、所属する欧州のチームなどから呼ばれた選手たちはチーム日本としての結束が強かったように見えた。Wカップで慣れていることもあろう。

水泳は400メートル個人メドレーや200メートルバタフライでの瀬戸大也のまさかの予選落ち、癌を克服した池江璃花子が参加した3つのリレー（そのうちの一つは新設の男女混合）で上位入賞ができなかったことなど、世界のレベルの高さを知らされた。午後に行われる予選だと、午前に比べより良いタイムを出す必要があること、日本の選手は翌日の決勝のために体力温存を意識せざるを得

ないこと、などの解説を聞いた。水泳は夏のオリンピックの華だ。思い出すのは小学校の時から早かった背泳の福島、ローズと争った長距離の山中、鈴木大地のバサラ、色々あるがそれからずいぶん時がたった。

陸上では大いに期待していた男子110メートル障害で泉谷ら三人の選手がいずれも決勝に進めず、また男子400メートルリレーで準決勝をへて決勝に進出した男子チームが、一走多田から二走山縣にバトンが届かず、途中棄権になったのも残念であった。下からバトンタッチする「安全バトン」で記録を上げてきた男子チームが、バトンタッチで失敗するとは思わなかった。ベテランの桐生選手は攻めに行き、ギリギリのところより早い記録（上位入賞）を狙ったこと、メンバーはいずれも速さの面では他国選手に比べて今一つだったこと（100メートルでは三人とも10秒台で予選落ち）にインタビューで触れていた。両種目とも解説者やマスコミなど周辺の強い期待が現実離れしていたようだ。私は中高の時代は走るのも遅く、体育は苦手だったが、高飛び、幅跳び、砲丸投げを授業でやった記憶を辿りながら、解説を聞き、観客の手拍子の少ないフィールド競技をテレビで眺めた。

新しい競技をいくつも見る事ができた。ストリート・スポーツでは三人制バスケット（3x3、Three on three）は動きが早く、長身選手だけが有利という訳でなく、手軽にでき、かつスポーツとして面白いと思った。スケボーは10代の若い選手が多く、平野歩夢が冬に次ぎ、夏にも挑戦した。小さな自転車を使うBMX、これも遊びの要素が多い。スポーツ・クライミングも面白かった。近くのスポーツクラブで一度やらしてもらおうか。九十九里浜でのサーフィングの決勝は台風接近で荒い波が来る中で、選手が良い波を探し、それに乗り、競う。点をつけるのは難しそうだが、これはスポーツの要素が大きいように感じた。

今回限りの競技として認められたカラテ karate に興味を持った。組手と形カタの両方を見た。空手の選手は眼光も鋭く、頭や顔はそのまま見せ、白い道着に赤または青の帯と防具（手と足・脛）をつけて登場する（道衣の内側にはプロテクターを巻いているらしい）。技の時に大きなかけ声を発する。二人が対戦する組手では、試合時間がわずか3分である。その間に間合いをとって構えた選手が、一瞬のうちに突きと蹴りをだし、時に選手は倒され、突きを加えられる。レフリーは主審と四人の副審がいるが、どちらが先に入ったかの勝負判定が難しく、し

ばしばビデオ判定が求められるのが難だが、先取点もつけられ、見ていて十分に面白い。それに対し、形は一人で演武を行うので、素人には差がはっきりとはわからない。すっと立ち、腰を少し落とし、仮想の敵に対し突きや蹴りを行い、力を入れたり、緩めたり、体幹が揺れないことも重要である。どこか仕舞と共通性もある。女性の解説者が複数の敵を相手とする形の意味するところを説明していたが、もう一度ユーチューブあたりで見てみたい。形は武道とスポーツとの間に位置するように思われる。結果は、男子は沖縄出身の喜友名諒が金を取り、最後に tatami に正座し、両手をつき礼をした。真の礼で、清々しかった。女子は残念ながら銀は取ったが、金はスペインの選手であった。国際カラテ連盟 W K F は本部をマドリッドに置き、世界選手権を開催しており、柔道ほどではないが、世界にかなり広まっているようだ。今回見たスポーツとしてのカラテでは技を止めているが、他に顔や胴に剣道のような防具をつける一派があり、そこでは技を止めずにフルコンタクトするようだ。男子の決勝ではサウジの黒人選手が相手を傷つけ、反則で負けたが、一步間違えると危険な技になるのは悩ましい。カラテは安全性をもう少し高めて、正式の競技・種目になったら良いと思うのだが。それには、フルコンタクトをし（技を止めず）、頭部や胴にプロテクターを

つけるテコンドーとの違いや両競技並立の必要性を国際的に認められねばならない。韓国が賛成してくれるだろうか。柔道に比べて、礼儀はしっかりし、審判も権威を持っていて好感を持てる。道着を持ち組み手を争う柔道より、離れて勝負するところがよい。柔道や少林寺拳法をやっていた娘婿にこの辺をもう少し聞いてみよう。孫は自分には合わないと言手を手をすぐにやめたらしいが、学校では何の武道をやっているのだろうか。

この他印象に残ったのはハンドボールである。ハーフ30分、合計60分。最後の週末に、フランスが出た男女それぞれの決勝試合を見た。倒れ込むようにシュートを打つが、普通の身長選手であっても六人でデフェンスを堅くするとなかなかシュートされない。ルールではシュートを打つ選手への妨害やオーバータイムなどのペナルティがあり、二分間の一時退場も時々ある。選手交代が自由におこなわれ、試合が切れないのも良い。昔、高校の時だったか、授業で1-2回やった。バスケほどのスピードや力強さはないが、ボールも少し小さく、自分でもなんとかできそうな気がする。ルールも複雑でなく、時間も短く、見ていて実に面白い。日本チームは男女とも予選で落ちた。ヨーロッパではハンドボール

は盛んで、プロリーグがあると聞く。

国別のメダル獲得競争は米中がトップを争った。当初出遅れていた米は最終日に女子バレーボールで優勝し（金39、金銀銅の合計で113個）、メダル総数だけでなく金の数でも、中国（金38、合計88個）を追い抜いた。日本は金は27個で第3位、合計では57個、ROC（ドーピングによりロシアは国としては出れず、オリンピック委員会として参加）、英国には負けたが第5位。いずれもこれまでで最多、日本は主催国として大きな成果をあげた。ただ金の目標は30個だったとの記事もあった。競技別では柔道で金9（合計12）レスリング5（7）、スケボー3（5）、体操2（5）、競泳2（3）が主なところ。卓球混合、ボクシング女子、カラテ男子形、フェンシング男子団体エペ、野球、ソフトボールでも金をとった。バトミントンや水泳は振わず、期待された数の金をとれず、他方で新競技ではサーフィンやスポーツクライミングで銀銅を複数個とった。バスケット女子は決勝進出、初の銀メダルをとった。

その他の国々では豪州が金17（合計46個）で6位。欧州では従来から強いイギリス（Great Britain）が金22で4位（合計は65）と最も活躍したほか、陸

上短距離や競歩、水泳などで目立ったイタリアが10（40）。他の国も、ドイツは10（37）、オランダ10（36）、フランスは10（33）とメダルの数はほぼ横並びであった。昔から貴族的な個人競技が強いと見られてきたフランスが今回は団体競技で好成績を上げ、ハンドボール男女・バレーボール男子で金メダル、バスケ男子・ラグビー男子で銀、バスケ女子で銅を取ったのも注目される。コロナ禍だったが、選手たちはチームメンバー間のコミュニケーションを良くしたのが勝因だとの記事を読んだ。柔道の新設の男女混合団体では、日本チームを破り金をとった。

日米の報道では、コロナ禍により国際競技の開催数が少なかったことを、いくつかの競技での不振の主因と指摘している。確かにそうであろうし、1年の延期も加わり、選手たちの抱いた不安や受けたプレッシャーは大きかっただろうが、これは全ての国の選手について言えるのではなかろうか。

映像を見ていて気がついたのだが、日本の選手団には外国語の名や姓の選手がかなりいるし、バスケ男女、ハンドボール男女、ホッケー男女は外国人の監督やヘッド・コーチが采配を振るっている（今や対象は野球やサッカー、ラグビーだ

けではない)。振り仮名がないと読めないようなキラキラ・ネームの選手たちも多い。米欧では移民出身の選手が昔から活躍しているし、湾岸諸国ではビーチバレーなどで、強豪選手を契約ベースで雇っていると聞く。オリンピックのナショナルチームとは何なのだろうか。多様性が推進される中、厳密な基準は所詮難しく、国籍で決め、それを頻繁には変えないようにするのだろうか（オリンピック憲章に一応の規定がある）。ただ、二重国籍や国籍付与の基準は国によって異なる。

開会式・閉会式はオリンピックの花形であり、テレビの視聴率も45%を超えた。ともに夜の8時から始まったが、開会式はソーシャル・ディスタンシングのせいもあり、入場に長い時間がかかった。今回はアフリカや島嶼国などで民族衣装をつけている選手団があったり、ブラジルのように極めてわずかの人数しか参加しない国もあったりした。入場の最後は次回の米、次回の仏、そして日本だった。フィールドに全員が入った後にセレモニーやアトラクションが長く続き、終わったのは深夜12時過ぎ。一部では芝生に座ったりしていたが、選手たちは楽しめたのだろうか。途中でかなり帰ったらしいが、やはり長すぎる。イベントの中には会場の大きなモニターに写すだけのものもある。自宅でテレビの

解説を聞きながら見ているにもかかわらずよくわからないダンスや日本語だけで流れる挨拶や宣言。選手たちがこれらの解説を英語やフランス語で聞いたり、読んだりし、皆が持っている携帯で楽しめるような工夫がなされていたようには見えない。

閉会式の方はすでに帰国した選手たちも多く、四つの口から入場した。和服姿の小池東京都知事から黒のロングドレスのイデルゴ・パリ市長へのオリンピック旗引き渡しのセレモニー、それに続く中継でのパリ紹介を含めても、全部で2時間半もかからずに終了。競技の緊張から解き放された選手たちはリラックスし、首からかけたメダルを見せあったり、携帯で写真を取ったり、閉会式の東京音頭ではもっと彼らに踊りの列に入ってもらってらよかっただろう。

日本の開催者は、日本と東京の歴史や魅力を外国の選手や競技関係者、IOC委員や式に参加するゲストに知ってもらうためにアトラクションを行う。現代と伝統を組み合わせ、特に前回64年のオリンピックにも触れ、さらに未来のためのメッセージを伝える。洋と和の要素を示すことも欠かせない。開会式の入場の時にかかったゲーム「ドラクエ」の音楽と五つの木の輪を組み立てる江戸の大工たち、海老蔵の暫の睨み。閉会式での世界的に知られているバンドとディスク・

ジョッカーに日本各地の盆踊り、坂本九の「上を向いて歩こう」。子供たちを連れて登場した大竹しのぶが歌ったのは、未来へのメッセージだそうだ。「君が代」を開会式では可愛いドレスをきた M I S H A が独唱し、閉会式では袴姿の宝塚の生徒たちが歌った。前回の平昌の時に使われたという「イマジン」やパリにつなげる「愛の讃歌」も登場したが、いささか古臭く感じた。コロナで亡くなった人たちを悼み、科学やスポーツの力でそれに打ち勝つのをダンス・舞踏で表現するのもなかなか難しい。テレビで見ている細切れの場面が続き、印象が散漫になる。ドローンも過去に平昌で使われたらしい。巨大な競技場でのイベントはこんなものかもしれない。いやこうした混淆・組み合わせこそが日本の文化の特徴かもしれない。批判もあるようだが、有識者が議論した基本コンセプトに沿って展開された開会・閉会式は、他にどんな風にしたらよかったのだろうか。途中でやめた野村萬斎のチームはどんな演出を考えていたのだろうか。

色々な場面で、今回のオリンピックの実質的な開催者はIOC（国際オリンピック委員会、仏語ではCIO）だということを強く感じさせられた。スイス・ローザンヌ（フランス語地方）に本部があるこの機関（NPO、NGOである）は五

輪の商標権を有し、その使用を管理し（パートナー企業から使用料を受け取る）、米 N B C などの放送会社から放映権の対価を受け取るなど、強力な商業力を持つ。今回は一貫してコロナ禍の下での有観客でのオリンピック開催を主張し、日本政府に強いコロナ対策を取らせ、自らも参加者にファイザー製ワクチンを供給し、マラソン会場を札幌に移す決定もここが行なったようだ。33の競技に関してそれぞれの国際統括団体と連携をとるのはIOCであり、日本の組織JOCは存在感が薄く、中心となったオリンピック組織委員会も結局は受け入れの責任を有し、IOCのリードのもとで具体的な式典・競技を実施するという役割分担のように見えた。

いくつかの場面では、IOC固有の意向や主張が表に出ていた。使用言語はIOCが強くこだわるところであり、公式行事は全て仏・英・日の順でアナウンスされたようだ（パラリンピックは英日で行っている）。開会式ではマイクロファイナンスを発展させたことでノーベル平和賞をとったムハメド・ヤヌス氏がビデオで登場し、アスリートが仕事をおこし、オリンピックは世界の発展と気候変動問題に貢献すべき、と述べた。IOCは今回ヤヌス氏に月桂冠賞を与え、パリ五輪でのアドバイスを受けている。聖火の点火者が大坂なおみになったのも多様

性を重視するIOCの意向と伝えられている。確かに王、長嶋、松井の三人が出てきたときは、あまりにプロ野球のイメージが強く、年もっており、驚いた。

日本とハイチの両親を持つ色の黒い大坂なおみは、メンタルヘルスの問題でローランギャロスの途中から試合に出ていなかった。その起用はずいぶん思い切った決断で、日本側からは出てこないものだと感じた。IOCはオリンピックの最中に東京で総会を開き一仏英二カ国語で行われたその様子をユーチューブでみた一、約1万人の選手たちの投票で選出された新しいアスリート委員数名の中から、フェンシングの太田雄貴を含む3名を閉会式で紹介した。彼らはアスリート委員会に属し、選手たちの関心が強い、メンタルヘルス（体操の米バイルズ選手もこれに悩んだ）とキャリアー形成（選手を辞めた後の就・創業）支援に取り組むらしい。オリンピックは若い人、大宗は20歳代が競技をする集まりである。若いアスリートの考えやセンスを反映させることが重要になっている。

腐敗した五輪貴族の集まりとの国際的な批判を受けることもあるIOCは、遅ればせながら一方で若いアスリートに近づき、他方でBlack Lives Matterの動きや国際的な社会・政治動向に敏感であろうとしている。19世紀末にオリッピ

ク再興を主導したフランスの教育者たるクーベルタン男爵をはじめとするヨーロッパの貴族たちがその後も牽引してきたオリンピック運動だが、最近では、統率力が高いと言われるドイツ出身のトーマス・バッハ会長のもとで、時代に合わせた改革が進んでいるように見える。61条92ページに及ぶオリンピック憲章（英日版）—最新版は2020年改訂。IOCの定款でもある—にざっと目を通してみた。卓越、友情、敬意を目指すという表現があり（オリンピック・バリューと言われる）、政治的中立もいうまでもなく昔から重要な原則である。今回強調された多様性と調和という言葉は憲章では必ずしも強調されていないようだ。開催地については、すでに24年のパリと28年のロスアンゼルスが同時決定されているが、次の2032年開催地は、オーストラリア・ブリスベンにする旨が今回の東京総会で決定した。東京も直面した数都市による激しい誘致競争、それに伴う委員への積極的なアプローチは、開催都市の財政負担増大の中で、持続性を重視した競技開催ができるか否かを判断する柔軟なアプローチに変わりつつあるようだ。

開会式ではオリンピック憲章にいう「国家元首」たる天皇陛下が短く開会を宣言

し、閉会式には名代として皇嗣（秋篠宮）殿下が参加。開会宣言の時は起立を促す放送が流れなかったようで、隣の菅首相などが少し遅れて起立、また皇嗣殿下は放送もないまま退出されたようで、カメラはそのときのお姿を写さなかった。

I O C はスピーチは会長と組織委会長に限り、開催国の元首や政治家などによるスピーチは認めず、宣言についても細かな表現までも憲章に定めている。1936年ベルリン五輪など政治に利用された過去から学んだ知恵である。日本中がテレビを見ている中、マスコミによるこの辺りの説明があってもよかったですのではないか。

結局今回のオリンピックは町中ではコロナ感染者が増えている中で（1日の新規感染者は15千人規模へ）、バブルに関して厳しい対策をとり、悪天候や高温という状況もあったが、予定された競技は全て完了した。死亡など大きな事故はなく、ベラルーシの選手の亡命はあったが、他には大きな政治的な問題やテロは起きなかった。懸念された選手たちの政治的意思の表明も公式行事ではほとんどなかった。少なからぬ世論の反対があったにもかかわらず、国際的な約束を履行すべく最終的な決断を行い、実行したI O C と日本政府・東京都などの判断

と努力を私としては評価したい。様々な見方であろうが、オリンピック開催とコロナ感染者の著増には直接的な因果関係はないであろう。

ところで、日本としてこのオリンピック開催により、当初世界や国内に訴えたかったことを示せたのだろうか。残念ながら東北大震災からの復興ぶりは海外の訪問客には見せられなかったし、「おもてなし」も住民やボランティアとの交流が大きく限られ、思うようにできなかった。なんと言っても外国から見物客が来て、国内観光することができなかったし、選手たちもすぐに帰国した。橋本聖子組織委員会長が閉会式で触れたように、小学生33千人が育てた朝顔の鉢とメッセージがいくつかの競技会場に飾られていたらしい。「アスリート・ファースト」というスローガンも一時はあったが、延期などで彼らの意見を聞く場面はなかったようだ。

長い準備の段階では、誘致に伴う贈賄容疑、国立競技場デザインの途中変更、五輪デザインの盗用疑惑・再制作、組織委での女性蔑視、式を企画・演出するメンバーたちの身障者やユダヤ人への配慮不足、それを理由とした解任など、思い出だけでも問題が次々と出てきた。これらはどこの国にでも程度の差こそあれ、見られることかもしれない。今回、日本が誘致に成功し、喜んだ8年前のブエノ

スアイレスの映像をみた。仏英を混ぜたスピーチした皇室の高円宮妃殿下も、写真に写る安倍前首相も今から見るとやはり若々しい。世界はそれなりの速さで変わってきている。特にコロナ禍は多くの国や世界レベルで所得の不平等を拡大させ、米英を中心に多様性の重視が強まった。こうした点の認識や行動の面で日本は世界的に遅れを取っており、それに関連した分野では主導権を I O C がとったようにみられる。

8月24日からはパラリンピックが始まる。1998年2月の長野五輪では妻が2週間の通訳ボランティアをやり、最終日に現地に行ったことがある。当時は町や駅、ホテルではバリアフリー対策が今ひとつであり、見かけた外人選手は車椅子にのり、段差のある駅で一人で乗り降りしており、その意気や体力に驚かされ、感心した。その頃に比べ大会の規模はずっと大きくなった。選手の数も4000人と聞く。先日は公式グッズショップでパラリンピック記念のTシャツを買った。代金の一部は寄付されるらしい。馴染みのない競技もあるパラオリンピックの放送も見てみよう。

そして、年が明けると2月には北京の冬季オリンピックである。この半年の間

に、香港での自由の制限やウイグル人への迫害を問題視したボイコットの動きは広まるのだろうか。3年後の24年7月に向けてパリがすでに都市型で、地球環境への配慮を高めたオリンピックを準備している。

日本についていえば、4年後の春には2025年大阪・関西万博が始まる。スポーツの祭典ではないだけに何をテーマにし、それをどう表現するかが重要である。事務局は地球温暖化への対応や伝統と現代の併存という考えに立ち、すでにSDGs推進とSociety 5.0の実現を掲げている。企業展示に関する説明も始まるようだ。今度こそ海外からの多数のインバウンド観光客を受け入れたい。東京を楽しめなかったオリンピックの選手たちをgo toキャンペーンで招いてもいいかもしれない。前回の1970年万博の時は、私は25歳、友人といくつかのヴァリオンを訪問。フランス館は列が長く入れなかったが、ケベック館でほぼ初めてと言えるワインを飲み、フランス料理を味わった。岡本太郎の考案した太陽の塔がシンボルであった。まだ若く、勤め先からのフランス研修生として派遣される直前であった。誰もが日本が国際化し、成長することを強く望んでいた時代である。それが大方実現し、国も個人もそれなりの豊かさを享受してきた。90

年台前半、パリに駐在していたときには名古屋市が誘致活動のために万博事務局 BIE のあるパリを頻繁に訪れてきたいたし、家族であるいは仕事で筑波、ハーノーヴァー、名古屋、淡路島の万博会場を訪れたこともある。それから半世紀強の 2025 年、私は 80 歳になる。高度経済成長を終え、高齢化し、安定した日本として、どのような未来を考え、どのような社会の構想を国際的に提示したら良いのだろうか。